

在日コリアンの祖国への貢献～教育・文化事業の事例研究

永野慎一郎

問題提起

在日コリアンの日本移住は1910年の日韓併合から本格的に始まった。それ以前には留学生を中心に790名（1909年）が日本に在留していた。1899年に外国人労働者入国制限法（勅令353号）が実施され、外国人労働者の入国は禁止されていたので、いわゆる単純労働者の入国はできなかった。しかし、日韓併合によって入国制限法は朝鮮人には適用されなかつたので、日本への移住は次第に増加した。1920年3万189名、1925年12万9,870名、1930年29万8,091名、1940年119万444名、1944年193万6,843名と増加し、終戦直前には200万名を越えた。徴兵や強制労働などのため、本人の意思とは別に、半ば強制的に連れられて渡日した者も多いと見られているが、勉学または求職を目的に自由意志で渡日した人たちも多いようと思われる。その多くは終戦と共に帰国したが、何らかの事情で引き続き日本に残留した人たちまたはその子孫が主として在日コリアンである。

在日コリアン（韓国籍・朝鮮籍）は1946年に64万7,006名であったが、2007年現在、59万3,489名と減少している。減少の理由としては、1959年から84年までに9万3,339名が北朝鮮に帰国しており、日本国籍への帰化者が2007年まで31万3,265名いる。在日コリアンには戦後留学して帰国せず、日本に滞在している人、またはビジネスマンの家族などニューカンマーと言われる人たちも含まれる。戦前から日本に居住している1世たちはすでに亡くなられたか、または高齢者が多い。彼らの中には戦前・戦後の厳しい経済状況において裸一貫で経済活動を始め、根性とチャレンジ精神で果敢に挑戦し、成功した企業家も多い。彼らの大部分は韓国の貧しい農村で生まれ、教育を受ける機会がなかった。しかし、祖国の発展のためには人材育成が重要であると認識し、故郷の教育・文化事業に私財を投入する傾向が多く見られている。

1960年代から始まる在日コリアン企業家による韓国の社会・経済発展への貢献は過小評価すべきではないと考える。この研究の一環として教育・文化面で貢献した数名の実例を挙げ、彼らが日本社会においてどのような体験をし、どのような人生観をもち、祖国の発展のためにどのような貢献をしたかについて、本人または関係者とインタビューなどによってとりまとめたものをここに紹介する。ここに紹介する在日コリアン企業家は一部に過ぎない。

本稿は、進行中の「韓国の経済発展に対する在日コリアン企業家の役割」についての共同研究の一部である。

事例1：康亀範（済州大学海洋研究所基金設立：1909年－94年：在日1世）

少年時代 康亀範（日本名康本亀範）は、1909年に済州島の資産家の四男として生まれた。

父親が儒学者だったので、6歳頃から儒教について学習させられた。一家が儒学に夢中になっている頃、韓国にも近代化の波が押し寄せてきた。父親だけでなく、兄弟の中に祖先から受け継いだ財産を守れる経営能力を持っている者はいなかった。土地を手放し、借金を重ねながらの生活が続いた。家族の中で働く者は母親だけであった。それで一家を支えることは不可能であった。儒教社会では長男が優遇される社会である。没落寸前であったとはいえ、残された財産は四男の亀範には回ってくるはずがない。済州島では希望が持てないことが分かった亀範はアメリカ行を思いついた。しかし、済州島からアメリカ行の船がなかったので日本経由を考えた。1927年2月、18歳の時、日本行を決行した。父親には反感があったが母親にはすまない気持ちであった。

大阪に到着すると、済州島出身が大勢居住している東区に向かった。済州島出身5名と相部屋で共同生活をすることになった。出稼ぎに来た人が小さいゴム工場などで、休む暇もなく働いている姿をみて、日本に行けば裕福になると、密かに思っていたこととは全く異なる現象であった。世の中甘くないことを目の辺りにして驚くばかりであった。済州島出身が集まるところには父親や康家の縁者を知る者もいたので、すぐ父親に知られてしまった。父親が連れ戻しに来ただ。父親は厳しくとがめはしなかった。母親は「よく帰ってきたね」と涙を流して喜んでいた。計画を練り直した。

苦惱と辛酸の東京生活 1回目の家出から半年後に絶好のチャンスが巡って來た。父親から土地を売った代金を貰って來いと言われたのだ。受け取った土地代金は400円。当時の金ではかなり大金だった。父には「代金はもう少し待って欲しいと言われた」と嘘をついた。これだけのお金があれば、康家の生活は当分保障されるとと思うと、心が痛んだが、目的を達成するために仕方なかった。未明誰にも気づかないように密かに家を出た。

大阪到着後すぐ東京に向かった。東京の亀戸にある済州島出身の知人の部屋に居候しながら、その知人の紹介で新聞配達をすることになった。言葉もできない上、周辺の地図も分からぬ状況の下で苦労の連続であった。新聞配達は迅速にしなければならないのに、他人の何倍も時間がかかる。言葉ができないから説明もできないので、誤解されることも多かつた。そこに民族的な差別が手伝って状況をさらに悪くさせた。そんなことで転職の繰り返しであった。まさに東京生活はアリ地獄であった。

アメリカ行も不可能であることが分かった。当時、韓国人はアメリカ行の渡航申請ができなかつたからである。勉強しようと考えて、中学校の夜間部に入ったが、日本語がよくわからなかつたので、授業内容が理解できなかつた。学校を辞めて再び働き始めた。知人の紹介で済州島出身女性と結婚しだが、暮らしあはよくならなかつた。苦惱と辛酸の連続であった。人生最悪の時であった。そのような時に生涯忘れられない人と出会つた。池田ゴムの池田社長である。東北農家出身の素朴な人柄で面倒見のよい社長だつた。新しく社員になつた亀範に「仕事はつらくないか」などと声をかけてくれたり、話し相手になつてくれた。

信川護謨工業所設立 池田ゴムが不景気のあおりで操業停止に追い込まれ、工場と設備を貸

し出しするという話を聞いて、それを借りることにした。ちょうど奥さんが実家から貰ってきたお金600円を資金に充てた。知人と二人で始めた。亀範が社長、知人は工場長、社名は亀範の本冠である信川をとつて、信川護謨工業所とした。1933年2月、信川護謨工業所がスタートした。自転車のグリップ部分のゴムなどを作ったものの、納品先を見つけるのに大変だった。納品先は主に大阪の自転車物品問屋だったが、新参者を受け入れてくれるほど甘くはなかった。会社の運営も順調ではなかった。長女が生まれ、家族を養う責任が増したことアメリカ行は完全にあきらめた。家族のためにも信川護謨工業所を盛り立てなければならなかった。汗と機械油で汚れた服を着て、工具と同じように働いた。どう見ても社長にはみえなかつた。身を粉にして必死に働いた結果、会社もようやく安定した。大勢の社員を雇っている時も亀範は社員と一緒に働いた。仕事だけでなく、食べ物も着る物も社員と同じだった。社員と区別するようなことは一切なかつた。

真面目にやればいつか報われる。大阪で販売店を見つけるのに四苦八苦している時に不思議な老人に出会つた。その老人の手引きで取引先が増え、事業も拡張した。大阪に新規工場を作り、80人の社員を雇うほど工場規模も拡張した。大阪の工場の規模が大きかつたので、生活の本拠を大阪に移した。後に長男が生まれ、生活も余裕ができた。

1938年に転機が訪れた。日中戦争が始まり、日本から中国および東南アジア方面への輸出は難しくなつた。信川護謨にもその余波が及び始めていた。ちょうど軍需産業が台頭し始めた時期であった。時代の変化に対応すべく、大阪の工場と設備を処分して、再び東京に拠点を移し、軍需産業との取引を開始した。需要に生産が追いつかないほど注文が多かつた。フル稼働しなければ追いつかなかつた。昼も夜もなく、機械を動かし続け、社長も社員も一丸となって、生産が受注分に達するまで働き続いた。主として軍に納めるベルトの材料を作っていた。利益の大半は設備投資に回し、機械をどんどん導入し、工場を拡張した。

しかし、戦火が激しくなるにつれ東京大空襲によって家も工場もすべて焼かれてしまった。苦労して作り上げた資産は跡形もなくなつた。戦後、祖国再建のために全精力を尽くしたこともあるつたが、祖国の分断によって在日社会も左右勢力に二分され、希望をなくし、ゴム会社の再建に取り組んだ。焼け跡の土地に形だけの工場を建て、信川護謨工業所を再建した。お客様に喜んで貰える製品つくりに努めた。雨ガッパやポストンバッグの生地の生産から始めた。技術革新によってゴムの特殊加工が進み、水道や電気洗濯機、自動車のドア部分に使う新型のパッキンが生まれ、信川護謨もパッキンの製造を始めた。同社製品が東京オリンピックの競泳会場となった国立代々木競技場で使用するゴム板の製品として選ばれた。「少しでも良い製品を」「自分でも欲しくなるような製品を」モットに生産活動を展開した。また住友化学工業と直接取引きできるほど信川護謨の製品は業界において信頼され、さらなる発展の契機を作つた。

42年ぶりの故郷訪問 1985年9月、42年ぶりに故郷濟州島を訪問した。既に亡くなつた両親の墓参りするためであった。両親の墓前で長い間の親不孝を詫びた。濟州島の多くの人が温かく歓迎してくれた。濟州島から船で木浦に渡つた。木浦での出来事は忘れられなかつた。

木浦は歴史のある港町であったが、戦後地場産業が乏しく、大企業もなかつたので、活気に欠けた町であった。多くの人が職を求めて大企業が進出している済州島へ出稼ぎに行くほどであった。康亀範一行は山ほどの荷物を抱えていたので、港から駅まで運ばなければならなかつた。しかし荷物運びの人を探しても見つからなかつた。途方に暮れて、警察署に飛び込んで相談した。警察官数人が探そうとしたが、それでも見つからなかつた。困り果てた時、警察署の幹部の一人が「私たちが運んであげよう」と言って、数人の警察官が雨の中で次々と荷物を運んでくれた。一介の旅行者のために荷物まで運んでくれるなんて恐縮きわまりであった。生まれて初めての体験に、びっくりしながらも感動を覚えたものだ。繰り返しお礼を述べた。韓国にも民主主義が確実に根を張っているという印象を受けた。警察官が困っていた旅行者を助けてくれるという奉仕の心に感銘を受けた。韓国はもっとも貧しい国であったので、失業者も多いはずだ。金さえ出せば喜んで荷物を運んでくれる人間はいるはずだと思い込んでいた。また街並みもさぞ汚いだろうと考えていた。ところが驚くほど街並みがきれいであった。めざましい国の発展とともに、それを支える人々の心もまた希望と意欲に満ちていた。木浦での体験が亀範の韓国観を一変させた。

済州大学に発展基金寄贈 済州島訪問の時、済州道庁を訪問し防衛誠金として3000万ウォンを寄付したことを皮切りに、1988年には済州大学海洋研究所基金として13億ウォン相当の不動産を寄付し、92年と93年にも同大学海洋研究所基金として多額の寄付をしている。亀範の没後も長男・康本徳守らの名義で2000万ウォンを済州大学発展基金に提供している。

康亀範は1994年に志半ばでこの世を去ったが、彼の遺志は子女たちによって受け継がれている。2006年4月に財団法人かめのり財団（竹内三郎理事長）が設立された。財団の10億円の基金は共立ビル（株）を受け継いだ次男・康本健守が拠出している。同財団の趣意書には、設立の経緯について、「亀範は1909年、韓国・済州島の儒学者の家に四男として生まれた。1927年に18歳で日本に渡り、努力と誠実な人柄で言葉や文化の壁を乗り越え、ゴム会社や賃貸マンションの共立ビル（株）を興し、発展させた」と記述している。同財団は、アジア諸国の青少年の交流を支援し、相互理解と共生をめざして活動している。その一環として高校生交換留学事業、大学生留学奨学金支給、日韓短期交流プログラムなどを実施している。

康亀範は生前「社会から与えられたものを社会に還元せよ」と言っていたので、その遺志を受け継いで「かめのり財団」は次世代を担う若い世代の交流に目を向け、活動している。

事例2：李根植（済州大学学術研究基金・奨学基金設立：1930－06年、在日1世）

少年時代 李根植は、1930年に済州島で生まれ、3歳の時、両親に連れられ渡日し、幼年期から青年期までは大阪で過ごした。日本海軍の軍属であった父親が終戦になると解放の喜びから帰国してしまった。16歳になったばかりの李根植は一人で残りし、働きながら学校に通わなければならなかつた。それどころか、済州島に帰った両親と兄弟の生活費も仕送りしなければならなかつた。当時のことを振り返って李根植は次のように述べている。

「当時を振り返ることは私には大変な苦痛です。当時の苦痛と暗澹たる気持ちを二度と思い出しましたくありません。お金を稼ぐためにどんな商売でもやりました。やってないことがないくらいです。1日 5000 円稼げば、1ヶ月 15 万円と目標を定め、それを達成するために食事を減らしながら働きました。ある時は列車の中で 1ヶ月以上生活したことがあります。当時、東京で生活必需品を買って大阪で売ると相当な利益がありました。

大阪から東京まで 12 時間かかりました。夜行列車で朝東京に着き、東京で商品を受け取り、また夜行列車で大阪に行く。列車の中で寝泊りする生活を繰り返しました。終戦後の混乱期にわずか 16 歳の時にこのようなことをやっていました。戦後日本の経済事情は両親が稼いで面倒みてくれるとしても大変な時期にすべてを一人で解決しなければならず、しかも済州島にいる父母の生活費と弟たちの学費を送金しなければならなかつたのですから。」

企業家として成功 1951 年に関西大学専門部経済学科を卒業して、東京に移住してからは、本格的に商売を始めた。少年時代から体得した金銭感覚がビジネス拡大に大いに役立った。新橋駅前で始めた飲食店経営が順調に進展し、店舗数も 8 軒に増加した。その頃、新橋駅前再開発のため立ち退きさせられ、1 億円の保証金を元手に池袋に 5 階建てのビルを建設し、遊技場などを始め、そのうち高田馬場、渋谷、柏、八王子などにビジネスが拡張された。

ビジネスに成功し、経済的余裕ができた頃から、李根植はずっと心の中で考えていた教育事業に取り組んだ。彼が教育事業に愛着を持つようになったのは彼が成長過程で受けた差別を克服するためであった。青年期に日本で一人暮らしながら民族的な差別を認識するようになった。それを克服する方法は二つあった。一つは差別に対しては即対応、すなわち暴力的対応であり、もう一つは忍耐と努力で克服し、日本人より良くなるという方法であった。彼は後者を選択した。日本人より優秀なところを見せることによって民族の自尊心を回復する方法であった。安昌浩の務実力行から学んだものだ。韓国人も十分な教育を受ければ日本人に劣ることはない、教育に関心を持つようになった。

李根植は貧しかったため、十分な勉強ができなかつたと後悔している。それが心の隅に残っていた。韓国人が日本において差別を受けることは韓国の国力が弱いからであり、国力は教育が土台になっていると考えていた。自分の経験を踏まえ、若い世代が十分な教育を受けられ、希望を持てるように教育環境を整えてやることが自分の役目であると考えた。彼は 3 歳の時に渡日したにもかかわらず韓国語は堪能であった。まず言葉から始めた。

教育・社会事業の開始 教育事業に携わる契機がやってきた。1990 年に東京韓国学校理事長に就任し、老朽化した校舎の新築、教育環境の整備に努めた。1995 年には財団法人韓国教育財団の理事長に就任した。財団の基金造成に努める一方、在日 2 世、3 世に韓国語普及のために韓国語検定試験を実施し、韓国語スピーチ大会も開催した。彼は教育事業だけでなく、社会事業にも関心を持ち、日本赤十字社に 1983 年から毎年 500 万円ずつ寄付して恵まれない人たちを助けた。この寄付は亡くなるまでの 23 年間続いた。総額 1 億 1500 万円を寄付した。日本社会

への恩返しでもある。

李根植は日本で育ち、差別を受けながらも日本人の中には良い人も沢山おり、道徳的にも学ぶべきことが多々あると言い、韓国は日本をあまりにも知らない。過去植民地時代の感情的なことからスローガン的克日で日本を無視し、知らないふりをするか、知ろうとしないかのどちらかであると分析し、これでは日本との眞の関係樹立は難しい。日本社会の信用を大事にするところと勤勉精神を見習うべきであるという持論であった。

韓国に対する支援には熱心であった。ソウル・オリンピックの時は在日後援会を通じて1億円寄付した。また、1997年末から祖国が金融危機に直面した時は、米国にあった預金百万ドルを韓国に移し替えた。これについて李根植は「国が憂えているからである。国が憂えないためにも優秀な人材を育て、世界に通用する立派な祖国になって欲しい」という意見であった。

人材育成のための奨学財団設立 1998年12月には6億2000万円の私財を投じて東京に財団法人青峰国際教育振興財団（後に青峰奨学財団と改称）を設立した。生まれ故郷済州道の漢拏山にちなんで青峰財団と名づけた。本国の発展に役立つ人材を育成するために有望な留学生に対して物心両面から支援するための奨学財団である。同財団は基金5億円に1億2000万円の運用資金で運営している。李根植の奨学財団設立の本来の趣旨は、済州道出身の優秀な学生を選抜して日本留学させ、全寮制で精神教育を重視する教育方針で人材を育成することであった。当初は済州道の高等学校を卒業した優秀な学生が家庭の経済的事情で大学進学できない将来有望な学生を選抜して、学費および生活費などを提供して思う存分勉強に励んでもらう奨学事業であった。計画的な人材育成によってまず済州道を良くすることが彼の夢であった。しかし、事情は簡単ではなかった。現実問題として高等学校で成績優秀な学生の大部分は国内の一流大学に進学しており、むしろ米国に留学する傾向である。成績優秀者が家庭的事情で進学できないケースは少ないし、さらに複雑なのは韓国には兵役制があり、高等学校卒業後すぐ日本留学することはさまざまな障害があるという現実にぶつかって、結局、日本の大学または大学院に在籍している韓国人留学生に奨学金を授与することとなった。そして2002年から在日学生にも奨学金対象を広げた。青峰奨学財団から奨学金を支給された学生は募集開始した1999年度から2008年度まで累計で310名に上る。一時は50名前後の学生に奨学金を支給していたが、創設者・李根植の急死後関連会社からの予定の寄付金が入らず、基金の運用益の減少から2008年度には23名止まりとなつた。

済州大学に学術研究基金・奨学基金設立 日本での奨学財団設立と並行して、故郷済州道の国立済州大学には1999年から2002年の間に2億円を寄託して青峰学術研究基金および青峰奨学金を設立した。学術研究基金は①世界的に著名な学術誌に発表する論文の研究、②地域社会発展のための研究、③海外派遣研究などに使用されることであった。優秀な研究者の育成のための支援事業であり、優秀な学生に奨学金を支給する奨学事業のための寄付であった。

また、済州市都坪洞で生まれた李根植は村の発展基金および奨学基金などの名目で約1700万

円寄付している。特に済州道に対しては溢れるばかりの愛郷心から、地域社会の発展と人材育成のために役立ちたいという想いから、多くのプランを持っていたようである。その一つとして済州道漢拏山のふもとに民族の自尊心を高めながら世界の若い世代と競争できる人材養成の搖籃を建設する計画を持っていた。しかし、道半ばにして突然病が襲ってきて2006年1月享年75歳でこの世を去った。

教育事業を通して競争力向上を期待していた李根植は「人生は真実である」という哲学を持っている。「至誠天に通ず」という言葉があるように、眞の生き方は相手に信頼を与え、その信頼が感動に伝達され、それによって志を成し遂げて幸せになると平素考えていた。

生前李根植は、お金に対する価値観について「お金はたくさんあればあるほどいいが、死ぬとき持っていくものでもないので、自分の人生のうち夢を実現できるのに必要なほどでいい」と述べたことがある。金を貯めるのにも才能が必要であるが、貯めたお金を社会のためにどのように役立てるかはもっと難しい。

事例3：鄭煥麒（晋州教育大学学術研究財団設立：1924年生まれ、在日1世）

青少年時代 1924年に慶尚南道晋陽郡の比較的恵まれた農家で生まれた鄭煥麒は、3歳の時、両親と共に釜山から関釜連絡船に乗って日本に渡った。下関に着いてから名古屋行の普通列車に乗った。名古屋の下町の南押切町に落ち着き、“朝鮮人には家を貸すな”と言われた時代であったが、長屋の1軒を借りられた。父親は建設現場で働いた。始発電車に乘ると電車賃が割引になると言って朝暗いうちに働きに出かけ、夜は星が出る頃帰って来た。家族のために黙々と働く勤勉実直な父親であった。母親も大きな家を借りて出かしげに来た在日同胞のための下宿屋を始めた。鄭煥麒は誠実な生き方をしている両親の背中を見ながら育った。働き者の両親の下で商業学校に進学した。自身も働きながら通学する勤労学生であった。父親は厳しい生活条件のなかでも働いて貯めたお金の一部を故郷に送金して土地を買うのが楽しみであった。父親はいつか故郷に戻るつもりでそのための準備でもあった。

鄭煥麒は名古屋市立児玉商業学校を卒業すると、通信会社に入社した。通信社員はホワイトカラーのサラリーマンである。憧れの仕事ではあったが、給料が低いのが難点であった。百万長者になるのが夢であった鄭煥麒は通信社を辞めてヤスリ工場に入社した。

太平洋戦争が激しくなると、韓国人青年にも1942年から兵役義務が課せられた。鄭煥麒にも徴兵検査の通知状が来たので、検査を受け、甲種合格となった。自分の身体が健康であるという証明ではあったが、これは直ちに戦争に駆り出されることを意味する。なぜこの国に命を捧げなければならないのか、と考えると眼れない日が続いた。父親は兵隊に行く前に息子を結婚させようと急ぎ、豊橋の乾物商の娘と結婚させられた。当時の結婚は見合いでも恋愛でもなく、親同士が決めるもので本人の意思は尊重されず、結婚式を挙げるまでは相手の顔も見ずに結婚させられることが通例であった。煥麒も例外ではなかった。

戦争はますます激しくなり、統制時代に入り、物も売れなくなつた。やがて空襲も激しくな

り、奥さんの実家は家族全員故郷に帰ってしまった。乾物商を継ぐ人がいなくなつたので、若き煥麒夫妻が乾物商を継ぐことになった。物がない時代なので、仕入れのために渥美半島、知多半島、伊豆半島、さらには石川県の港町にまで精力的に出かけて行つて、ワカメ、コウナゴ、ニボシ、塩付け小エビなど手当りしだい仕入れた。それを軍需関連企業などに売り込んだ。徴兵検査を受けた同級生たちはほとんど出征したが、不思議にも煥麒には令状がこなかつた。1945年6月、米軍B29の大空襲によって1月に生まれたばかりの長女と奥さんを亡くしてしまった。家が全焼し、家族を亡くしただけでなく、彼がそれまで苦労して貯めた全財産を一夜にしてなくし、文字通り無一文になってしまった。

戦後多くの韓国人が帰国するなか、鄭煥麒一家は日本に残ることにした。両親は故郷に土地も買っており、戻って農業でもしたいと考え、家財をすべて故郷に送ったが、諸般の事情で帰国できなかつた。

夫妻で買い出しの体験 戦災で九死に一生を得て意氣消沈していたとき、再婚話が進展し、広島に住んでいる父親の友人の娘の具日会と結婚することとなつた。具日会は高等学校を卒業したばかりであった。戦災で無一文になつてしまつた煥麒は姉夫婦の厚意で4畳半の1室を借りてのささやかな新婚生活であった。新婚時代は食糧難の時代であったので、二人で農村へ買出しに出かけて米や野菜などを買ってきて名古屋で売る。名古屋発夜11時の夜行列車に乗つて長野県や新潟県の農村に向かつたものだ。朝6時頃に着いて1日中買い物などして、帰りも夜11時頃の列車に乗ることが多かつた。この時刻だと取締りの警察官が手薄だったからである。列車は買い出し客で超満員であった。通路もトイレの中も人で一杯である。7時間身動きできない状態であった。持参した反物などと米と交換したり、お金で買つたりした。30キロないし40キロの米を買って若い奥さんと二人でかついで列車に乗り込んだ。運悪く一斉取締りに会えば、それまでの苦労は一瞬にして水の泡なのだ。そういうこともしばしばあった。若い二人のこのときの苦労が精神力を強め、なんでもできるという自信を持つようになり、それが成功の源泉であった。

既成服店開店と事業拡大 当時、名古屋でも闇市マーケットが方々にできた。戦後の混乱期であったので正常な経済活動ではなかつた。こういう時代こそビジネスのチャンスでもある。煥麒夫妻は小銭を貯めて名古屋駅裏手の少し奥へ入つたところの一戸建の店舗を9万円で買い取つて既成服店を始めた。2階建で、1階は店舗、2階は住まいにした。はじめて自分の店を持つようになった喜びと期待に胸をふくらませて、広島方面で軍需物資の払い下げ品が大量に出まわつていると聞き、広島へ仕入れに行つた。駅前の闇市に軍需物資が山のように積まれていた。その量の多いのに目を取られ、仕入れのお金を入れたカバンを足元において品物を触つて一瞬の隙にカバンを取られてしまった。混雑の中で犯人探しは無理であった。まだ品物は一点も買ってなかつたし、2年間働いて貯めた全財産といえる金がなくなつて目の前が真っ暗になつた。手ぶらで帰らなければならないことを考えると胸が詰まる想いであった。開店を1週間にひかえて、仕入れができないと店を開くこともできない。奥さんに何といつて釈明すべきかわからない。血

の出るような苦労をして得た資金なのに自分の不注意でこうなってしまって悔やむだけであった。開店日は12月24日のクリスマス・イブを予定した。1週間しかないのに売る品物がない。そこで考え付いたのが、自分の洋服を売ることにした。幸いに身長も体重も標準型で一般向きであった。2年間洋服生地の売買をしながら気に入った生地があると、自分用に仕立てたものだ。23着ほどあった。20坪の店舗にいっぱい服が並ぶはずであったが、23着ではいかにも寂しい。しかも自分が気に入った服ばかりである。売れても売れなくてもいいと高めの値段をつけた。初日に半分くらいは売れた。奥さんと二人で懸命に働いて商売は軌道に乗った。

既製服の販売だけでなく、洋服の仕立てをして卸小売業を始めた。仕立て職人募集の新聞広告を出したら、50人ほど集まった。当時は物をつくれば売れる時代であった。店は繁盛して名古屋駅周辺に5店舗を経営する経営者となった。事業は順調に拡張し、マツヤ機械製作所、マツヤ電器製作所、若葉自動車、東交通、マツヤ土地、株式会社琥珀、東名ボウリング場などを設立し、現在、琥珀グループ会長として現在も現役で働いている。

教育事業・名古屋韓国学校設立 経済的な成功だけでは満足できなかった。在日同胞の権益向上のために愛知民団の結成に参加し、同胞の金融機関の必要性を感じると、金剛信用組合（のちに愛知商銀に発展）の設立に努めた。また、日本で生まれ、日本社会の中で育った2世、3世は母国の言葉も知らず、民族の歴史も理解していないことに嘆き、民族教育の場が必要であると考えた1世の有志と立ち上がって、1965年に愛知韓国学園建設委員会が設立された。鄭煥麒は委員長として募金活動を開始し、目標の1億円は難なく集まった。鄭煥麒は集まらなければ自分で出す覚悟で募金活動を始めたら、自分は1000万円で済んだと回顧している。

同学園の建学趣旨は、2、3世が戸籍上だけの韓国人でなく、日本社会で韓国人としての自覚と誇りを持ち、在日同胞社会の将来を担う国際性豊かな人材を養成する。また、日本社会の地域の構成員の一員であることを自覚させ、各々が自分の能力に応じ、地域社会に尽くし、日本社会から尊敬される国際人を育成することである。

鄭煥麒は愛知韓国学校の設立以来、35年間理事長を務め、建学精神に沿った民族教育と韓日理解、協力の役割を果たしてきたと述べている。これから若い世代が引き継いで欲しいと期待している。彼は教育事業には並々ならぬ熱心さがあった。財團法人韓国教育財團の設立当初から理事を務め、多額の財政的な貢献をしており、朝鮮奨学会理事も務めた。

晋州教育大学学術研究財団設立 祖国への支援事業は多くの学校に奨学金を寄付し、失業者の救済のためなら役立ちたいと日本から正式送金が厳しい時代にも採算を度外視して会社を設立した。受入体制の不整備、日本と韓国の商道徳や習慣の違いなどで苦労したが、1986年に京畿道富川市で三成化学株式会社を設立して事業を軌道にのせ今日に至っている。また、新韓銀行の創立メンバーとして貢献した。現在も新韓金融持株会社在日懇親会会长を務めている。ソウル・オリンピックの時は祖国で初めて開催されるオリンピック競技を成功させるために1億円寄附している。

主要な教育事業としては、2世たちの教育のための初等教育教師養成機関である晋州教育大学に財団法人晋州教育大学佳亭学術研究財團を設立し、10億の基金を提供した。その基金の運用益で奨学金支給、教授たちに学術研究費支給、海外派遣、交換留学生プログラムへの助成などに支給している。1999年から2007年までの間に、58名の教授と302名の日韓両国学生が恩恵を蒙っている。この中で立派な人材が育ってくることを鄭煥麒は期待している。

鄭煥麒は「信用は無形の財産」という信条を持っている。日本社会で成功したのはまさに‘信用’であった。信用こそ成功の秘訣なのだ。

事例4：裴翊天（加祚翊天高校設立：1926年生まれ、在日1世）

青少年時代 裴翊天（日本名武本政夫）は、1926年に慶尚南道居昌郡加祚面の山奥の貧しい農家の6人兄弟の長男として生まれた。父文麟は身体が弱かったため農業を嫌って単身日本に渡った。しかし、日本での生活はもっと大変だった。それに耐えられず一度帰国したが、日本よりさらに悲惨な農村生活を目のあたりにして、家族と一緒に再来日した。翊天が4歳の時であった。翊天は小さい時は身体が弱かったので、その頃の話は良く覚えていないという。

名古屋東区立杉村小学校に入学すると、クラスに朝鮮人は一人しかいなかった。いわゆる“いじめ”的対象にされ、良きいじめられた。差別が激しかったので日本人のふりをして屈折した少年時代を過ごした。

家庭が貧しかったため学業を続けることはできず、中学校を中退して働くことになった。最初の仕事は電気技術見習工であった。しかし日本での生活も楽ではなかった。やがて戦争が終わり、解放後の祖国で気持ちを新たにして生活を立てようと、日本在住の多くの韓国人たちが帰国を急いだ。翊天の家族も1946年に帰国した。しかし、故郷での生活は一層困窮度が増した。貧乏生活に辛抱できず、翊天は一人で再渡日した。名古屋で不良少年として暮らしていた。生活環境を変えるしかないと考えた翊天は1955年1月、29歳の年に上京した。

金融会社設立 東京での生活は決して楽ではなかったが、やりがいがあった。寝泊は親切なお寺で、3畳間の部屋と、布団、座布団、茶碗1個、机1つを貰い、子供と二人暮らしの生活を始めた。名古屋での不良少年時代にできた子供で、女性とはすぐ離れたが、子供は自分で引き取った。東京でも満足すべき仕事があるわけでもなく、土木工事現場などで重労働をし、テントの外交員、醤油販売などで、お金を貯め、55年11月には資本金18万円で金融会社を設立した。当時の18万円といえば、現在の200～300万円相当である。金融会社はいわゆる高利貸しだ。月1割の利息だったので、商売は繁盛した。翌年には社員10人を雇い商売を拡大した。社員の仕事は集金係りである。テントの外交員、醤油の販売もやりながら3つの仕事をかけもちした。そのために睡眠時間は1日3時間しかなかった。昼夜働いて事業も順調に伸び、お金も相当貯まった。生活の余裕もできた。やはり気になるのは故郷にいる父母兄弟のことであった。錦衣還郷の気持ちもあって一時帰国を決意した。

故郷の貧しさに胸を痛む 60年代の韓国、特に山村地域は極貧であった。貧乏暮らしには慣れてきたつもりであったが、未だに遅れている故郷の貧困状態には胸を痛めた。帰国の前に周囲の人たちから鉛筆など文房具を持っていけば、日本製は何でも売れるので金儲けになるといわれてその気になって、鉛筆やノートなどを大量に買って持っていた。しかし、村の生活は鉛筆やノートを買う余裕などなかった。結局売るために持っていた文房具は故郷の小学校の全生徒に無料配布することにした。これが後に学校建設のきっかけになった。それから加祚面の3つの小学校にオルガンなどを毎年寄付することになった。

翊天は自分が貧しさゆえに中学校を中退したことを悔やんでいた。せめて故郷の子供たちには自由に勉強してもらいたい。人材育成こそが村の貧困退治への道なのだ。そのために必要であれば学校も作ってやろう。自分ができることならなんでもやってみようと決心した。その気持ちが学校への寄付として現れた。

高等学校設立 加祚面と加北面は郡庁所在地居昌から12～18キロ離れている。二つの面で600余名の中学生が毎年卒業しているが、地元に高等学校がないため、高校進学をあきらめるのが現実であった。地元を離れて高校に進学しようとすれば、下宿代など過重な負担になり、負担に耐えられない父母は子息の高等学校進学をあきらめなければならなかつた。これは辺鄙な山村で暮らしている人たちの宿命でもあった。また、別の問題も発生した。多少経済的余裕があつて、他地方に進学する場合は、親元を離れて自由になったという解放感から不良になつてしまふケースが多かつた。これに悩んだ村の有志たちが地元に高等学校を設立しようという動きとなつた。とりあえず、分校でも作ろうと計画し、在日の企業家・裴翊天に当時の金で300万ウォンの寄付を要請した。要請を受けた裴翊天は300万ウォンでどのような学校が作れるのかと問い合わせたところ、300万ウォンでは到底に無理だということが分かつた。そこで、会社を一つ作つて潰したつもりで、学校設立を決意した。

裴翊天はソウルの現在のソウル大学付近に値上がりを見込んで400坪の土地を買って所有していたが、20万ウォンで売却し、面の公有地に加えて約6000坪の土地を買収した。校舎建築には1億ウォン必要であった。政府の認可も下り、建築工事も順調に進み、1977年5月、居昌郡の大々的な行事として多くの郡民が参加するなか、20教室の新築校舎の起工式が行なわれた。それから10ヵ月後の78年3月に一部の教室が完成して最初の新入生182名（男子112名、女子70名）を迎える、念願の開校となつた。翌年には245名の新入生が入学した。土地買収から用地整地、校舎新築、設備、備品、器具などすべての費用を裴翊天一人で負担したまさに個人の学校であった。負担した費用は約3億ウォンといわれている。現在の価値としては数百億円と推定される。

裴翊天は生まれ故郷が貧乏から抜け出すためには学ぶことであり、学べる学校が必要であると考えて私財を投げ出して学校建設を始めた。決してお金の余裕があったわけでもなかつたが、一度決めて約束した以上、約束を守るために必死に働いて送金したと当時の状況を語つていた。

一人ですべての費用を負担することとなると、大丈夫かと心配する人もいた。ある新聞記者は

途中で投げ出すのではないかと、地元に住んでいる母親に迫った時、「息子は約束したら必ず守る人間だ。心配なさるな。万が一でも息子が約束を守れないような事態が生じたら、私の所有しているすべての田畠を売ってでもお金は支払う」と言ってくれた。裴翊天は「母親は偉かった」と良き理解者であった母親のことを思い出しながら、涙ぐんでいた。

加祚翊天高校と命名 在日コリアンとして数々の差別にも負けず七転八起の末、経済的地盤をつくり、血と涙の結晶として貯めた財産を惜しまずに投入して故郷の後進たちの教育のために学校を設立し、地域社会の発展に多大な貢献をした裴翊天に対して、文教部長官、慶尚南道教育監、慶尚南道知事などが裴翊天の崇高で高潔な思想を称え記念するために彼の名前を校名に入れ、加祚翊天高等学校と命名した。

1979年3月、裴翊天は莫大な個人財産を投入して設立した高等学校を国家に献納した。学校の建設だけでなく、優秀な学生には安心して勉強に励むように奨学金を支給している。奨学金の支給は生きている間は続けたいと胸を張っている。2007年まで約5000名の卒業生が卒業した。

教育文化事業に貢献 裴翊天は加祚翊天高等学校への寄付だけではなかった。居昌明倫学園に學習機材の寄贈、加祚小学校に放送設備一式寄贈、加祚小学校・加祚中学校に教育用機材の寄贈、金海国際空港拡充工事に寄付、面民会館の建設などに多大な貢献をすると共に、地域の古寺「古見寺」の補修工事費用も負担した。

これらの功績に対して慶尚南道教育委員会、居昌郡教育委員会、慶尚南道教育監、内務部長官などから感謝状を授与された。

さらに在日の民族教育のためにも関心を示し、東京韓国学校に1億円寄付した。

現在、東京や千葉県にホテルや貸ビルなどを数軒所有している。

事例5：河正雄（美術品を集めて祖国の文化事業に貢献：1939年生まれ、在日2世）

少年時代 河正雄の父親は全羅南道靈岩郡で生まれ、1927年に単身日本に渡り、大阪のガラス工場、針金工場、鉄鋼所などを転々とした。母親は同じ靈岩出身で、「日本に行けば幸せに暮らせる」という仲人の言葉を信じて、日本に渡ってきて父・憲植と結婚した。結婚1年後に正雄が誕生した。生活は決して楽ではなかった。工場の仕事は賃金が安く、二人の賃金を合わせても食費にもならなかった。

そのような時、秋田に住んでいる叔父から「秋田へ来い」と誘われた。少しほとが生活が楽になると想い、大阪から1000キロの距離を汽車に乗って冬の秋田に着いた。雪の降る秋田での冬場の労働の厳しさは想像を越えるものであった。「飯はどうにか食えるが、これでは身がもたない」と、父親は家族を連れ、秋田と大阪を行ったり来たりの生活であった。

「正雄一人くらいなら私一人でもなんとかやっていける。靈岩へ帰ろう。大阪や秋田よりも靈岩のほうがました。気候もいいし」と言い残し、母親は幼い正雄の手を引いて家を出た。二人は

汽車に乗り、再び下関から連絡船に乗って故郷靈岩に帰った。正雄の3歳の時であった。靈岩の親戚は「何をしに帰ってきたのか」と暖かく迎えるところか、冷たい処遇であった。靈岩でも人びとの生活は苦しかった。農作業や家事の手伝いをしても、女一人でやっていける状況ではなかった。母親は二人目の子供を身ごもっていた。女の子を出産した。母親は二人の子供を連れて再び夫のいる日本に戻った。

大阪で終戦を迎えた。両親は解放された祖国に帰る決心をし、家財道具はすべて送って、帰国便の配船の順番まちであった。その間、正雄は朝鮮初級学校に通っていた。結局、配船の順番は回ってこないまま、配船が打ち切りになった。一家は再び途方に暮れた。日本で再出発しなければならない羽目になった。

叔父のいる秋田に再び戻った。両親には再び過酷な労役の日々が始まった。父親は秋田杉や薪炭の運搬、母親は土方で砂利やセメントの運びをした。正雄は秋田県生保内村（現仙北市）の生保内小学校に転校した。正雄は新聞配達や豚の餌の残飯を集めるなどして家族の生活を助けながら、通学した。正雄は学校では優等生であった。進んで奉仕活動をし、クラスの中心的な存在であった。中学生の時、ある日校長先生から話しかけられた。

「生徒会は君の好きなようにやりなさい。何か要望があればいつでも言いなさい」と言ってくれた。正雄はリーダーとして評価され、人間的に信頼されていた。県内の中学校から代表一人が参加する合同キャンプがあった。正雄は生保内中学校の代表として参加し、そのキャンプで生涯に渡る友人を得た。その一人に後の直木賞作家・西木正明がいた。

正雄は絵の方面にも才能があった。市展、県展などの賞を総なめした。その誇りは自信を確立する大きな助けとなつた。「絵に対する自信から、自分の人生に自信を持てた。朝鮮人だからという理由で卑屈さを感じたことはまったくなかった」という。

正雄の家庭の事情では高校進学は無理であった。母親が自分は小学校も出てないのでこんなに苦労している。子供たちは何とか進学させたいと、ヤミ米の商売を始めた。秋田中を歩き、米を買い集めて東京に持っていて売る。当時は食管法によって米は管理・統制され、個人の流通は禁じられていた。危険が伴う商売なので結構儲かっていたが、警察の取り締まりに会い、拘束されたこともしばしばあった。正雄の母親は男勝りであった。ヤミ米商売で5人の子供を全員、高校進学させた。「その母の姿勢を誇りに思っている。素晴らしい親だと思います」と正雄は胸を張っている。

埼玉へ移住・電気店開業 正雄の大学進学は母親の夢でもあったが、これ以上親に負担させるわけにはいかないと、進学をあきらめて、自立するために一人で東京へ出た。埼玉県川口市に落ち着いた。昼間は仕事しながら、夜は日本デザインスクールへ通つた。学費を捻出するために食費を削ったため栄養失調で軽度の失明に見舞われた。そのため失業し、デザインスクールはあきらめた。

正雄は24歳の時、尹昌子と結婚し、二人で始めた電気店が東京オリンピック開催年に当たり、テレビの需要が一気に高まって商売は繁盛した。川口在住の同胞たちはわざわざ正雄の店から電

気製品を注文してくれた。

電気店の経営が軌道に乗って数年経つてから、正雄は新宿のデパートのギャラリーで、全和鳳の絵『弥勒菩薩』に出会った。この全和鳳の絵との出会いが在日コリアン画家の絵画コレクターとなるきっかけとなった。全和鳳は1951年に行動美術賞を受賞し、仏像や風景を題材に創作活動を続け、96年に89歳で生涯を閉じた。東洋的宇宙観の漂う独自の作風を築き上げた画風を正雄は「祈りの芸術」と称している。正雄は全和鳳のアトリエを訪れ個人的な親交を深めた。1981年に「全和鳳画業50年展」を企画し、東京・京都・ソウル・大邱・光州で開催した。正雄は自分のコレクションの中から百数十点を選び、一人で会場確保、運搬作業を行なった。50年展は各地で成功した。

正雄が成人してから初めて父母の故郷である全羅南道靈岩を訪れたのは1974年、35歳の時であった。父親にせかされて親孝行するつもりで実現した。気候の暖かくなった5月に家族で靈岩を訪問した。まず、父親の祖先の墓参りをした。町を見下ろす小高い丘の上に一族の墓が整然と並んでいた。正雄は急に胸がつまり、熱い涙が込み上げてきた。

「来てよかったです」親子は墓の前でぬかずきながら抱き合った。墓参りをして初めて「ここ靈岩も自分の故郷である」と実感するようになった。

父親は日本に戻ってから、「靈岩で田んぼを耕しながら余生を送りたい。お前には迷惑をかけないから、靈岩に田んぼを一枚買っておくれ」と正雄に頼んだ。正雄は「いいよ」と約束したが、それから数ヵ月後に父親は亡くなった。64歳だった。

光州市立美術館との関わり 正雄の故郷光州（全羅南道の中心都市）との出会いは、光州日報社社長の紹介で画家吳之湖に知り合ってからである。吳之湖は著名な画家であるだけでなく、南道文化会館を設立するなど文化活動にも熱心で、光州の文化的発展のために多大な貢献をした文化人であった。二人は意気投合した。正雄は吳之湖の暖かい人格に触れ、自分の志への確信を深めた。吳之湖は1982年に77歳で亡くなった。

1992年、光州市立美術館が完成したので、見に来ないかと吳之湖の息子で画家の吳承潤から誘われた。光州市立美術館は韓国初の地方美術館で、近代的な設備を誇る美術館であった。しかし、館内には所蔵作品が150点にも満たない閑散とした寂しい風景であった。吳承潤は切り出した。「ご覧の通り、この美術館は設備だけは完璧だが、中身がないんです。河さんのコレクションの中から一、二点寄贈してもらえたなら有難い。厚かましいお願いですが、光州の文化的発展に力を貸していただけませんか」

「引き受けましょう」と正雄は即座に回答した。

正雄は自分のコレクションの中から、全和鳳、郭徳俊、郭仁植、文承根、宋英玉、李禹煥の6人の在日作家の計212点を光州市立美術館に寄贈した。93年には「河正雄コレクション」を記念する特別室が開設された。「在日の文化を守り伝えること。在日同胞の生き様を本国の人たちにきちんと伝え、理解させること」。これが河正雄の夢でもあった。その夢の第一歩が光州市で花開いたのである。

吳之湖が河正雄に会うまでは在日侨胞に対する認識が良くなかったが、「河正雄を見て在日侨胞への認識を改める」と言った時はショックを受けざるをえなかつた。本国での在日同胞に対する見方があまりにも偏見と蔑視に満ちていることを改めて思い知らされた。正雄はその時、「しっかりしなければ駄目だ」とみずから言い聞かし、在日として生きてきたもの、生きるものプライドを本国の人々に伝えることの大切さを強く感じた。在日2世として生きる正雄の大きな転機であった。

100億円相当の美術品を寄贈 河正雄の93年の光州市立美術館への寄贈は始まりであった。99年にはピカソ、ルオー、アンディ・ウォホール、シャガール、ベン・シャーンなど、世界的な巨匠の作品を含む471点を追加寄贈した。それまでの寄贈は普段から趣味で集めていた美術品がほとんどであった。それから4年かけて計画的に収集した美術品1182点を2003年に同美術館へ寄贈した。この中にはマリー・ローランサンなど海外の作家をはじめ、在日コリアン作家の曹良奎、文承根、金石出、韓国の黃栄性、朴祿彤、洪成潭らの作品が含まれている。さらに2008年1月には1691点の美術品を寄贈した。このように光州市立美術館には4回にわたって合計3502点の美術品を寄贈し、ほかに美術図書1000余点も寄贈している。河正雄が光州市立美術館に寄贈した作品だけでも100億円の価値があると評価されている。

河正雄の美術品寄贈は光州市立美術館だけではなかった。釜山市立美術館に孫雅由作品118点を寄贈し、朝鮮大学にはブロンズ「明日の太陽像」と共に、孫雅由、郭仁植、郭徳俊の作品、日本の浮世絵作品、北朝鮮・中国作家の美術作品の178点を寄贈している。また父親の生まれ故郷の靈岩郡には1466点の美術品を寄贈している。そして全羅北道立美術館にも孫雅由の作品122点を寄贈している。

「寄贈は金持ちだけがすることではない。気持ちや労働・知識も寄贈できる。小さなものでも自分が持つ能力と才能を社会のために活用すればいい」

河正雄は「私の人生は苦悩と苦痛の連続でしたが、公共の利益のために生きることは、決して損でも、人生の無駄でもないと自信を持って言えます」と語っている。彼の素直な心情を覗かせている。

また、光州盲人福祉協会創立に寄与し、光州盲人福祉会館建設にも多額寄付し、光州ビエンナーレ開催に尽力した。光州市立美術館では河正雄青年作家招待展を開催するなど青年作家の育成にも力を注いでいる。

河正雄は韓国文化・芸術活動を支援することで韓国社会の発展に貢献した数少ない在日文化人である。河正雄は韓国だけでなく、日本においてもさまざまな分野で文化・芸術活動や支援事業を行なっている。河正雄は一連の支援事業をメセナ活動、運動という。若い人たちは国・民族・出身地の枠を超えた国際的な視野を持って考え、行動する人材になって欲しいと期待をかけている。そして韓国朝鮮大学から美術学博士を授与され、同大学招聘客員教授として若い学徒の育成にも力を入れている。

また、河正雄は2008年12月、李王朝最後の皇太子・李垠に嫁いだ日本の元皇族李方子（旧

姓梨本宮方子）が残した写真、日記、手紙などの資料 684 点を韓国政府に寄贈した。

この資料は李方子妃の李垠殿下との婚礼写真、結婚前の日記、伊藤博文の訪韓時のアルバムなど日韓近代史研究に必要な貴重な記録である。李方子妃の記録映画制作に携わったことのあるプロダクション会社山口卓治社長に「散逸すると困るので預かって欲しい」と李方子妃から保管を依頼されたものを日韓関係史研究に役立ててもらいたいと親交のあった河正雄に山口卓治から寄贈を依頼された。

李方子は当時の皇太子裕仁親王（後の昭和天皇）のお妃候補として名前があがつたこともある。日韓併合後の 1920 年、「内鮮一体」の象徴として人質のような形で日本で暮らしていた李垠殿下と政略結婚した。世間では「悲劇の王女」と呼ばれていた。